

タイトル	“extension” をめぐるマクルーハン研究の検証：リチャード・キャヴェルの『空間におけるマクルーハン』について
著者	柴田，崇；SHIBATA, Takashi
引用	年報新入文学(10)：86-119
発行日	2013-12-20

“extension”をめぐるマクルーハン研究の検証

——リチャード・キャヴェルの『空間におけるマクルーハン』について

柴田 崇

はじめに

個々の事実を統一的に説明する体系を理論と呼ぶならば、M・マクルーハン (Marshall McLuhan 1911～1979) の思想には少なくとも一つの理論を認められる。本稿で取り上げるマクルーハンの理論は、「エクステンション extension」という概念に基づく身体論によって構成されている。ここであえて「構成」と言ったのは訳がある。マクルーハンの思想におけるエクステンションは少なくとも三つの意味に分節でき、三つの意味からなる身体論の組み合わせによって理論が構成されているからである。単に複数の意味を重ねるのではなく、複数の意味の構成による立体的な構造が存在する点に、マクルー

ハンの理論の特徴がある。

以上の理論については、既に別稿（『マクルーハンとメディア論』）で詳しく論じた。同書では、理論の論証に加え、これまでのマクルーハン研究において上記の意味での理論研究がいかにか疎かになってきたかを書いた。確かに、エクステンションに注目した先行研究はある。しかし、それら大部分が、この概念がマクルーハンの理論を理解する手がかりになることを見落としており、一つ、または二つの意味を分節するだけで満足してしまっていた。同書の主題は、三つのエクステンションを分節した上で、それらが構成する理論構造を提示するところにあつたが、この主題は、これまでに書き綴ってきた小論を集成するのに十分な字数を著書という体裁で与えられたことによって達成できた。

とはいえ、『マクルーハンとメディア論』では、一冊の著書として主題の一貫性を優先せざるを得なかった。論証に直接関わる議論を球体の太陽に喩えるならば、太陽の周囲に見える暈（光軸）の議論、特に先行研究の紹介と検証を割愛せざるを得なかった嫌いがある。本稿の目的は、「エクステンション」に注目した先行研究のうち、最も問題の核心に接近したと思われるカナダの R・キャヴェル（Richard Cavell⁽¹⁾）の議論を紹介し、その成果と課題を検証するところにある。

論述の便宜上、本稿でも『マクルーハンとメディア論』で展開した議論を再録することになる。三つの意味への分節を中心にした「エクステンション」の議論には、方法論上、その起源を特定する手続きが随伴する。正統な系譜を描く作業は、同時に、正統から外れる異端を描く作業にもなる。同書では、正統を明確にすべく、異端に属する文献を可能な限り網羅したが、小論の体裁の本稿にはその余裕はない。したがって、第一章では、本稿の議論に必要な範囲で、同書で展開した「エクステンション」に関

する知見を抜粋して示すに留める。次いで第二章でエクステンションに着目したキャヴェルの議論を紹介し、第三章で、第一章の知見に基づいてキャヴェルの議論を検証する。

『マクルーハンとメディア論』でマクルーハンの思想の理論的側面を論じ尽くした直後に発表する本稿は、まず、同書の補遺の性格を持つ。テキスト内の構造分析に特化しがちな理論研究は、テキストが置かれた文脈を捨象する危険を常にともなう。この点を想起するならば、マクルーハンの理論研究も、テキストの外にあるジャンルの観点、この場合はマクルーハン研究の観点から理論を捉えなおす作業を経て初めて完成する。理論研究の核であるエクステンションについて最良の先行研究を紹介する本稿は、書き落とした事項のまとめという以上に、同書を完成させるピースの一つであると言える。他方、小論の体裁であることを理由に、本稿ではエクステンションの異端の議論を割愛してある。以上の意味で、本稿は同書と相補的な関係にある。現時点での十全なマクルーハン理解のために、同書を併せて読まれることを願いたい。

1. マクルーハンの思想における「エクステンション」

第一章の主題は、マクルーハンの思想から分節できる三つのエクステンションを紹介するところにあるが、エクステンションがマクルーハン研究の重要課題の一つであることを確認するために、この概念の「起源」と先取権をめぐる論争を概観しておきたい。

マクルーハンは、『グーテンベルクの銀河系』(*The Gutenberg galaxy*, 1962)の中で文化人類学者のE・T・ホール(Edward Titchell Hall 1914～2009)の『沈黙の言語』(*The Silent language*, 1959)から

エクステンションを含む文章を引用している⁽²⁾。引用の要諦をなすが、「すべての人工物は、かつて人間が身体、または身体の特定の箇所を使って行っていたことのエクステンション extensions と見做せる」(McLuhan, 1962, p.4) という箇所である。ホールによれば、道具をつくる動物の人間は、身体のある部分を「エクステンド extend」し、本来身体が行うべき仕事を人工物に代行させてきた。例えば、今日の発達した輸送網は、かつてわれわれが足と背で行っていたことのエクステンションである。この意味で、ホールにとってすべての人工物は人間の身体のエクステンションなのである⁽³⁾。

エクステンションの語の使用にあたってマクルーハンがホールを参照したのは間違いない。また、マクルーハンの記述からホールと同じ用法を見つけ出すこともできる⁽⁴⁾。とはいえ、後述するように、マクルーハンが使うエクステンションには少なくとも三つの意味がある。ホールは、『沈黙のことば』では、上記の意味でしかエクステンションを使っておらず、後年、この概念を複数の意味で使用し始めるが、その時期はマクルーハンが三つの意味を提示した後である。

論争が起きた時期に限定しても、マクルーハンの剽窃を難じるのは無理がある。というのも、ホールがエクステンションで記述される人工物を物質的なものに限定していたのに対し、マクルーハンは、当初から、言語や発話などの非物質的なものもエクステンションで記述できる人工物に含めていたからである。マクルーハンは、『グーテンベルクの銀河系』の段階で、エクステンションを「感覚の外化 *outring*、あるいは、ことばに表出されたもの *uttering*」(McLuhan, 1962, p.5) と言い換え、「externalization」(op. cit., p.265) と同義で使用する一方、『沈黙のことば』にはこの言い換えは登場しない。論争の時点で二人は別の意味でこの語を使用しており、その後、ホールがマクルーハンと類似す

る意味でエクステンションの語を使い始めたことで論争が複雑化したというのが事実なのである。

結局、両者の間で論争に決着は着かなかった。にもかかわらず、マクルーハン研究の分野では次第に「マクルーハンの無断使用」が定説になっていった。一九六三年以降のマクルーハン研究を集めた『マクルーハン…賛成？ 反対？』（*McLuhan: pro & con*, 1968）には編者による「現在までの伝記」（“Current biography”, 1967）⁽⁵⁾ が収められているが、ここではホールの主張が全面的に支持されている⁽⁶⁾。以後、エクステンションは、マクルーハンの無断使用癖への批判⁽⁷⁾を中心に、反対論者（con）たちの格好の攻撃目標になった。

マクルーハンの死後、彼の共同研究者や弟子たちとホールの間でこの論争の「和解」が成立する。『今を掴め』（*Take today*, 1972）をマクルーハンと共著したB・ネヴィット（*Barrington Nevitt*⁽⁸⁾）は、一九九四年に『マクルーハンとは何者だったのか？』（*Who was Marshall McLuhan?*）を編集したが、同書は当事者であるホールに論争を総括させた。「マーシャルは早い時期から二つのプロセスと格闘していた。彼はそれらを *innering* と *outering* と呼んでいた。悩みの種は、このメタファーが人々に理解されにくいことだった。私の『沈黙のことば』を読んだ彼は、*innering* と *outering* のプロセスを表現できて、なおかつ一般人にも理解しやすくするヒントを得た」（*Hall*, 1994, p.149）。『探究』誌（*Explorations*）の創刊に携わって以来、マクルーハンと数々の共同研究を行ったE・カーペンター（*Edmund Carpenter* 1922～2011）も、その後、ホールの総括を追認した⁽⁹⁾。

マクルーハンは最期までエクステンションの起源にこだわり続けた。そのこだわりには相応の理由があったはずである。以下、エクステンションの起源を探る作業を行い、こだわりの理由を解明する作業

に取り掛かる。まず手始めに、ホールのエクステンションからこの語の系譜を辿り、その意味を画定してみよう。

1—1. 拡張

ホールのエクステンションは、道具が本来人間の身体に備わった機能を「代行 substitute」し、「拡張 extend」することに重点が置かれていた。この意味と論理を持つエクステンションを、以下「拡張」と表記する。道具が人間の仕事を代行し、人間に備わる機能や能力を拡張するという議論は、実は、ホールに特有なものではなく、同時代に限定しても、コンピューターの未来を考えた論者たちの記述に多く登場する。

一九四〇年代にマイクロ波とミサイル技術の開発に能力を発揮したS・ラモ (Simon Ramo 1913～) は、一九五〇年代から六〇年代には、草創期にあつたコンピューター技術の利用法についても数々の論文を発表するなど、コンピューター開発を主導した一人だった。コンピューターという新技術の未来像を構想する際にラモが使用したのも、拡張のエクステンションだった。

一九六五年の「知的道具としてのコンピューター」には、「機械、そして情報処理における人間と機械のパートナーシップによる人間の知性の大規模な拡張 extension は、今世紀 (二〇世紀) の主要な技術的進歩になるだろう」(Ramo, 1969 (1965), p.47) という予測とともに、本、ノート、計算尺やレジスターが人間の脳の拡張であるのと同じく、諸々の電子システムは人間の脳のより広範な拡張である、という拡張の道具観が見られる⁽¹⁰⁾。一九六三年の「システム工学の本質」には、さらに明快に拡張の原

理が記述されている。「私たちは長い間、筋肉の機械による拡張と置き換えを経験してきた。そして今日、機械の方が人間よりうまく遂行する機能を取捨選択するのがよい工学技術の条件である」(Ramo, 1969 (1963), p.376)。これまで人間は、筋肉を使う仕事を機械に置き換える(代行させる)ことで筋肉の機能を拡張してきた。ラモはこの発想を敷衍し、コンピュータが発達しつつあった時代に、脳と感覚を使う仕事を機械に置き換える方法を模索したのである。

代行による拡張のエクステンションは、既に一九五〇年代後半には特異なものではなかった。コンピュータにより人間の知性を拡張するという発想の嚆矢は、V・ブッシュ (Vannevar Bush 1890～1974) の知性増幅機械 (IA: Intelligence Amplifier) にある。ブッシュは「われらが思考すべきこと」(“As we may think”, 1945) の中で、記憶拡張装置 (memex: memory extender) の構想を提唱した。また、ブッシュとラモに触発されたD・エンゲルバート (Douglas Engelbert 1925～2013) は、後に「マウスやウィンドウの発明者としてコンピュータの歴史に名を刻むことになる。一九六二年にエンゲルバートが著した論文もまた「人間の知性を増強するための概念フレームワーク A conceptual framework for the augmentation of men's intellect」と題されていた。ブッシュ、ラモ、エンゲルバートのいずれもが、コンピュータとの分業によって人間の知性を「拡張 extend」「増強 augment」「増幅 amplify」「向上 enhance」する可能性を論じた。

拡張の系譜は、一九五〇年代からさらに遡ることができる。唯物論の立場から科学技術を論じたイギリスの物理学者J・D・バナール (John Desmond Bernal 1901～1971) は、一九二〇年代に代行と拡張をもとに技術を考察し、大工業時代の後に来る未来を予測したが、拡張から人工物を考える視点は、

二〇世紀初頭の技術哲学に広く見られるものだった。例えば、U・ヴェント (Ulrich Wendt⁽¹¹⁾) は、技術の進歩を精神化の進展と考え、機械化について次のように説明している。「機械によって人間の労働力はより機械的な形態を保持するのではなく、反対により精神化された形態を保持するのである。粗野で単調な労働は絶えずますます機械の世界へ引込まれ、そして人間労働力は絶えず肉体的により楽でより精神化された活動へ解放される。単に機械のみがこの方向に働くのではなく、一切の技術的操作もまたこの方向に働くのである。たとえば運輸機関の改善、道路、海、運河の諸工事の改善、河川の修理、仕事部屋と労働部屋とをもった地上工事、広大な焚火および照明装置など、これらはすべて人間の機械労働力を節約し、筋力を少なく、思惟力を多く要求する一層高尚な労働型式へこの労働力を解放することを目指しているのである」(ヴェント, 1906 三枝他訳, 1953, pp.32-33)。「技術はそのもろもろの発明によって人間労働力を絶えずより高い課題へと導き、絶えず筋肉力を少なく思惟力を多く要求し、平均的な労働水準を常に高める。これは技術の本質である」(op. cit. p.33)。ヴェントの技術哲学も、「粗野で単調な労働」を機械に代行させ、代行によって生じた人間の労働力をより思惟的で精神的な活動に振り分けることで労働力全体の量と質が拡張するという論理から成り立っている。

代行と拡張の論理は、K・マルクス (Karl Marx 1818～1883) の『資本論』(*Das Kapital*, 1867～1894) にも登場する⁽¹²⁾。大工業時代の機械装置を分析したマルクスは、機械装置が、労働対象に働きかける道具機、原動力を供給する動力機、そして両者をつなぐ配力機構で構成されていることに着目する。その上で、機械装置の成立を、まず、それまで人間によって操作されていた道具が機械装置の道具に転化し、次いで、原動力を供給する動力機が転化される歴史であったと指摘する⁽¹³⁾。ここでも、手工業の

道具から大工業の機械への発展が、人間が身体とは別の機構に仕事を移行し、代行させ、それまでの機能を拡張するプロセスとして捉えられている⁽¹⁴⁾。

拡張の「原型」探しは、プラトン (Plato/Platōn 427?～347? B.C.) の『パイドロス』(Phaedrus) にまで遡る。『パイドロス』では、エジプトの発明神テウトがエジプト王タモスに、エジプト人の知恵と記憶力を高めるものとして文字を披露する。これに対し、タモスは、「書いたものを信頼して、ものを出し出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分の力によって内から思い出すことをしないようになるから」、また、その場合の「知恵は、知恵の外見であつて、真実の知恵ではない」から、文字には、テウトの言うのとは逆の影響があると反論する⁽¹⁵⁾。ここでも、道具が人間の機能(知恵と記憶力)を代行すること、その結果として、本来の機能が拡張(あるいは縮小)されることの二点が主題になっている。

拡張は、新しい技術を記述する際に使われるオーソドックスな概念で、最近では、サイバネティクス学者のK・ウォリック (Kevin Warwick 1954-) が『私はサイボーグ』(I, cyborg, 2002) で展開したサイボーグ論でも中心的な役割を果たしている⁽¹⁶⁾。このように、拡張は、プラトンの思想にその原型を求められ、以来、各時代の技術水準を反映しながら使われてきた。最もオーソドックスで最もありふれた概念について使用の後先を論じるとすれば、その論争は不毛といわざるを得ない。

論争の開始時期に用法について言えば、ホルのエクステンションは完全にこの系譜に属する。他方、マクルーハンのエクステンションは「感覚の外化 *outering*」、あるいは、ことばに表出されたもの *uttering*」(McLuhan, 1962, p.5) や、「externalization」(op. cit., p.265) に言い換えられており、一見して、

拡張に回収できない意味を含んでいる。

ホールによる論争の総括をもう一度見てみよう。「マーシャルは早い時期から二つのプロセスと格闘していた。彼はそれらを *innering* と *outering* と呼んでいた。悩みの種は、このメタファーが人々に理解されにくいことだった。私の『沈黙のことば』を読んだ彼は、*innering* と *outering* のプロセスを表現できて、なおかつ一般人にも理解しやすくするヒントを得た」(Hall, 1994, p.149)。明らかに拡張と異なる意味が含まれるにもかかわらず、ホールの総括で論争が決着したのは、引用中の意味が拡張のヴァリエーションの一つと見做されたからだと推測できる。結論を言う、マクルーハンの発言からは拡張とは別系統のエクステンションを分節できる。以下、拡張と同じく系譜をたどる作業を通じて、この点を明らかにしたい。

1-2. 外化

ホールも指摘したように、マクルーハンのエクステンションは、*outering* および *externalization* に言い換え可能であり、さらにそれらは *innering* と対で使用されている。暫定的に、*innering* を内化、*outering* を外化と訳出しよう。

『グーテンベルクの銀河系』では、外化が *externalization* と言い換えられているのと即応して、内化が *interiorization* に言い換えられている。『文字』のようなメディアの *interiorization* は、われわれの感覚比率を変え、精神活動を変容させるか?」と題した節¹⁷の議論を踏まえ、*interiorization* および内化とは、ある文化圏に新しい技術が導入され、人々がその技術を慣習的に使用するようになる状

態を指すのが分かる。内化の結果、感覚間の比率が変化し、精神活動の変容としてあらわれる。

では、外化は一体何を指すのか。それを理解する手がかりが、次の引用にある。「簡単に言うところ新しい技術によって一つまたは複数の感覚をわれわれの外にある社会に extend すると、当該文化の内部で、人々の感覚間に新しい比率が形成される (*The Gutenberg galaxy*, p.41)」。新しい技術は、一つまたは複数の感覚を身体内部から外部に extend したものを指す。引用の主題は、人工物が社会に産出される様子の描写にある。内化と併せて解釈すると、社会に生み出された新しい人工物、すなわち身体から外化した人工物が内化されることで、人々の感覚間に新しい比率が形成される、となる。

引用中の extend は、第一義的に「内なるものを外に出す」＝「外化」を意味している点であり、内化と対になって人工物が人々に影響を及ぼす因果を描写している点である⁽¹⁸⁾。これらの点を導きの糸として拡張とは別の系譜がたどれば、マクルーハンの意図、すなわち拡張に還元されないエクステンションの存在が証明できるだろう。

技術哲学の歴史をひもとくと、マクルーハンが依拠したと思しき思想の系譜に容易に出会える。それは、E・カップ (Ernst Kapp 1808～1896) の器官射影 Organprojektion のアイディアである。カップの器官射影説は、人体の諸器官と外界に存在する道具が形態、機構の点で類似性を持っていることを出発点にする。道具は人体を意識的に模倣してつくられたのではなく、無意識的に体内の機構を射影（内なるものを外へ投げ出す、前の方へと投げ出す、前方へすすめる、外へうつす (das Vor-oder Hervorwerfen, Hervorstellen, Hinausversetzen und eines Innerlichen ins Äussere)」（三枝, 1977, p. 229/ Kapp, 1877, pp. 29-30) してつくられてきた。そこからカップは、道具を検証すれば体の内部機構を明

らかにできるのではないかと考えた。「視覚器官がひとそろいの力学的仕掛でもって射影を実現し、そしてその解剖学的構造に戻してみた関係を知らせてくれるようになってきてはじめて、視覚器官の生理学的謎が解かれることができたのである。人間は、無意識的に生理的な視覚器官にならって形づくった器械から、こんどは意識的なやり方で眼の中にある光線屈折のもともとの発生点へ、つまり『水晶体』へと、名まえを移したのである」(三枝, 1977, p. 232/Kapp, 1877, p. 79)。

射影幾何学の起源が一九世紀前半のモンジュ (Gaspard Monge 1746～1818) と J・V・ボンズレ (Jean Victor Poncelet 1788～1867) の画法幾何学から B・パスカル (Blaise Pascal 1623～1662)、G・デザルク (Girard Desargues 1591～1661) を経てルネッサンス期のイタリアの透視図法、遠近法などの実用幾何学に遡れることを考えれば、器官射影説に流れ込む系譜を外化の源流と見做すのには相應の説得力がある。しかし、器官射影説をより深化させた構図を持ちながら、西洋思想のさらなる古層を流れる系譜が存在する。それが、古代ギリシャのヒポクラテス (Hippocrates/Hippokrates 460?～370? B.C.) を水源とする医学思想の系譜である。

科学哲学者の F・ダゴニエ (François Dagognet 1924～) は、X線 CT や MRI などを駆使する現代の医療技術について次のように述べている。「現代医学は、身体を外化しながらも、内部から読解するための多くの手段をもっています。それは何も身体を文字通り外化する *extérioriser* ではありません。それはあくまで、内部を表す外なのです」(Dagognet, 1996, p. 24/ダゴニエ, 1996 金森訳, 1998, p. 20)。ここでダゴニエが前提にしている外化の発想は、西洋医学の祖とされるヒポクラテスの記述にも見出せる。「何を見るのにも視覚によるのが誰にとってもいちばん良いのであるが、膿瘍の患者や肝臓

もしくは腎臓の患者、総じて体腔部に疾患のある患者については目で見るわけには行かない。それにもかかわらず、医術は援けになる他の諸手段を発見したのである。すなわち音声の清濁、呼吸の遅速、それぞれ与えられた出口から排出される各種の体液の臭い、色、濃淡などの徴候を目安にして、すでに犯されている体の部位や、これから犯され得る体の部位を判断するのである。もしこれらの徴候のないばあいと、自然（身体）がおのずとそれらの徴候を示さないばあいには、人体に害をおよぼすことを避けながら強制的に排泄させる方法を発見した」（ヒポクラテス、小川訳、1976, p.97）。医術は、まずは、身体が自ずと外化した物質を手がかりに、体内の状態を判断する技術である。しかし、もし身体が内部を知る手がかりとなる物質を自ずと外化しない場合には、人体に害のない範囲で、例えば、酸性の食物や飲物を飲ませるなどの手立てで身体に働きかけて強制的に外化を促す技術も備えている。意識的に外化を促して内部を知ろうとする医術の最先端に、文字通り身体の組織を外化させるのではなく、X線や高周波磁界を使って非侵襲的に、映像という表象の外化を実現した現代の医療技術が位置しているのである。

ヒポクラテスとカップの発想は、外化したものが内部を知るための手がかりになるという点で共通している。但し、外部からの働きかけで外化を意識的に引き起こせるとする点はカップの器官射影説になり。前者が後者の論理を包摂する点を考えると、ヒポクラテスを外化の起源と見做して問題ないだろう。カップが器官射影説を構想した当時、医学思想の系譜がたびたび文化の表層に現われていたことを示す記述が存在する。「カップは、感覚の外的なものへの関係を説明するために、なおまた一般に私たちが表象をつくり出すことに対して、この語 *Projektion* が生理学者たちや心理学者たちから用いられ

ていることを指摘している」(三枝, 1977, p.229, c.f. Kapp, 1877, pp.29-30)。カッパ自身は固有名をあげていないが、外化に相当する発想は、実験医学の提唱者として名声を博したC・ベルナル (Claude Bernard 1813-1878) の他、やや時代は下るがS・フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) の思想にもみられる。フロイトは、内部の好ましくない感情を無意識的に抑圧して外部の対象に帰属させる防衛機制に投影 projection の語を用いた。ここでも投影は、無意識を含む内部過程を説明する手がかりとして捉えられている⁽¹⁹⁾。

外化のアイディアは、ヒポクラテス以来、時に伏在し、時に顕在しながらヨーロッパ思想界に連綿と受け継がれてきた。マクルーハンが依拠したのは、この系譜のエクステンションなのである。その証拠に、マクルーハンの著書における外化の概念は、『グーテンベルクの銀河系』以後、「内なるものを外に出す」というベクトルを逆転し、身体内部を説明する意味で利用されるようになるのである⁽²⁰⁾。

マクルーハンの外化は、この概念に特有の論理を正確に継承したという意味で正統に位置づけられる。ホールは晩年、人工物の産出を描写するためにエクステンションを使用し始める。しかし、ホールのエクステンションには内部を知ろうとする契機が一切含まれていない⁽²¹⁾。ホールは、意識的にそれを行ったかは疑わしいが、拡張に別の意味を上書きしつつエクステンションの先取権を主張し続けたのである。

論争の決着については贅言を要しないだろう。一つ確認しておくならば、マクルーハンのエクステンションは、マクルーハンのオリジナルではなく、外化の正統に位置づけられるアイディアである。マクルーハンが主張しうるのは、外化の著作権ではなく、外化の系統の嗣子としての地位にすぎない。

さて、マクルーハンの思想を特徴付けるのは、外化のアイディアを継承したという事実だけではない。以下に説明するように、マクルーハンの著作からは、拡張と外化以外の、第三のエクステンションが分節できるのである。とはいえ、マクルーハンは、三つのエクステンションで人工物を重ね描いたわけではない。エクステンションに焦点を絞ることで見えてくるマクルーハンの思想の特異性は、三つのエクステンションを立体的に組み合わせて理論を構築したところにあつた。一九七〇年の著作で完成する「探索の原理」がその理論である。

本稿で「探索の原理」の形成過程を追跡し、その全貌を提示する余裕はない。

「探索の原理」の掉尾を飾る第三のエクステンションを概観するに留めたい。

1-3. 延長

第三のエクステンションは、道具使用の記述で頻繁に使用されるアイディアである。道具を使いこなすとき、その道具が、あたかも身体の一部になったかのように感じる。このような現象は、盲人にとつての杖、剣の達人にとつての刀などの比較的単純な機構のものから、自動車や重機、航空機などの複雑な機構を持つものにまで見られる。道具が身体の一部になり、道具の先端まで身体感覚が伸びていることから、このエクステンションを「延長」と訳出しておこう。

延長で記述される現象については、K・ヤスパース (Karl Jaspers 1883～1969)⁽²²⁾ や M・メルロー・ポントーイ (Maurice Merleau-Ponty 1908～1961)⁽²³⁾ のものが広く知られている。「暗黙知」や「創発」の概念で科学における発見過程の解明に挑んだ M・ポラニー (Michael Polanyi 1891～1976) も延長で

道具使用の現象を説明している⁽²⁴⁾。

延長のエクステンションについても枚挙に暇がないが、その起源に至る道筋を明確に示してくれるのはほとんど見当たらない。その理由は、延長を援用する者自身が、その起源に無関心であるからに他ならない。次に見るギブソン (James Jerome Gibson 1904～1979) の記述は、自覚的にこの概念を使用した極めて稀な一例である。

ギブソンは、一九六六年⁽²⁵⁾と一九七九年⁽²⁶⁾の著作で、ともにハサミを例に挙げながら、道具を使用する時、触覚が握りの部分から道具の先端に移動する「現象」を記述しているが、ここでは「現象」を *extension* によつて記述している後者の該当箇所を取り上げて、その意義を解釈する。

「使用時の道具は一種の手の延長したものの *extension* であり、手の付着物、または使用者自身の身体の一部になっている。したがって、道具はもはや環境の一部ではない。しかし、一旦使用を離れると、道具は環境中の単なる遊離物になる。この時、確かに掴むことも運ぶこともできるが、道具は観察者の外に存在するものでしかない。身体に何物かを付着させる能力は、生物と環境の境界が皮膚の表面で固定されてはおらず、移動しうるということを物語る。より一般的に言えば、この事態は『主観』と『客観』の絶対的・二元論が間違っていることを示唆するのである」(Gibson, 1986(1979), p.41)。道具は、使用されていない時には環境の一部を構成する遊離物にすぎないが、使用される時には身体に付着して使用者の身体の一部になる。この時、皮膚の表面で固定していると考えられてきた生物の境界は、使用者の身体の一部となった道具の先端に移動する。

ギブソンがユニークなのは、「現象」を記述する際に延長の概念を正確に使うことで、この系譜の

原型に斬り込んだところにある。extension が R・デカルト (Rene Descartes 1596～1650) の「延長 extensio」に由来することは容易に推測できるが、「主観」と「客観」の絶対的三元論の誤りを指摘するギブソンの記述は、デカルトの存在論の正確な読解を前提に展開しているだけでなくデカルトの二元論を覆す点で、特筆に価するのである。

デカルトは、神なる無限の実体と、精神および物体からなる有限の実体とを区別した後に、思惟的存在たる精神と延長的存在たる物体を分離した。後者、つまり心―身の二元論は、「思惟するもの」である精神が存在するためにいかなる空間的場所をも必要としないのに対して「延長するもの」である物体は端的に空間的な存在であるという、存在の資格の二元性を意味する。これら二つの存在の属性が、それぞれ「思惟 cogitatio」と「延長 extensio」である。この段階では、精神ならざる身体は、当然、「延長」の属性を有するものに分類される。心身二元論で問題になったのが、単なる精神でも単なる身体でもない身心を兼ね備えた「人間 Homo」の存在であった。デカルトは、精神がその身体と結合する場所を「松果体」に定め、物心分離的な理論哲学的立場と併設的に第三の実在としての「人間」を認めるという実践的立場を構えることでこの問題に対処した⁽²⁷⁾。このような構制の結果、デカルトの存在論は、「延長」の属性を有するいわゆる物体と、物体の属性を備えつつその他の物体とは異なる身体という、二つの異なる物体を並存させることになったのである。

デカルトの存在論は、心―身だけでなく、こうした身―物の二元論も包含する。延長 extensio の属性を備えたものが extensum であることから、便宜的にいわゆる物体を extensum e (environment)、身体を extensum b (body) に置き換えてみると、ギブソンの記述の意義が鮮明になる。『主観』と『客観』

の絶対的「二元論」では、生物（人間）と環境の境界は、皮膚の表面で固定されていて決して移動しない。この場合、道具は、使用される時にも、環境を構成する物体、つまり *extensum e* と考えられなければならない。これに対し、ギブソンは、使用に供されている時、道具を単なる物体と考えるべきでないと主張した。環境の側の延長したものの *extensum e* と考えられてきた道具は、使用時に身体（手）の延長 *extension of the hand*、すなわち身体の側の延長したものの *extensum b* になる（前置詞 *of* は「所属」の意味で解釈すべきである）。そして、身体と物体の間にあったはずの境界が道具と物体の間に移動することを指摘する。ギブソンの言う「主観」と「客観」は、デカルトの思想から論理的に導かれる身―物の二元論、すなわち、*extensum b* と *extensum e* の二元論を指す。ギブソンの「現象」の記述は、道具の使用時にこの二元論がめぐることを指摘するものと、ひとまず理解できる。

ギブソンは、道具の考察を次のように締め括った。「もつと語るべきことがあったかもしれないが、ともあれ、今後、道具を考えるための導入にはなってくれるだろう。ここでは議論を比較的小さく持ち運ぶのできる道具に限定してしまったが、技術的存在である人間は、もつと大きな切断、掘削、粉碎、圧搾のための道具と機械や、土木機械、建設機械、そしてもちろん移動のための機械もつくってきた」（Gibson, 1986 (1979), p.41）。ギブソンは、ハサミを例に展開した論理がより大きな道具や複雑な人工物にも適用できることを示唆して考察を終えた。

延長の議論はあまたあり、また拡張の議論の中にも道具の着脱を問題にするものが散見される。しかし、ギブソンのように「境界」という空間的な観点を一貫させなければ、デカルトに遡る系譜に正確に定位することも、デカルト流の身―物の二元論がめぐる事態として道具の使用を記述することもできな

一見、機能の拡張が明白な人工物もあれば、身体内部の機構を写し取ったようにしか見えない人工物もある。達人の域に及ばずとも、日常的に、筆記具や眼鏡は身体の一部として使用されている。そもそも人工物の多くは、その多寡の違いはあるにせよ、三つのエクステンションの意味を併せ持っている。この事実によつて、三つの意味の分節が妨げられてきたと考えられる⁽²⁹⁾。

一人の思想の中に三つの意味が分節されて登場するという事態は、極めて稀と言わざるを得ない。マクルーハン理解は、この極めて稀な事態に気づくことから始まるのである。

次章で紹介するキャヴェルの仕事は、三つの意味の分節に到達した点で、他のマクルーハン研究と一線を画すものになっている。まずは、キャヴェルの分析を概観しよう。

2. キャヴェルによるマクルーハン研究

現在ブリティッシュ・コロンビア大学で教鞭をとるキャヴェルは、二〇〇二年に『空間におけるマクルーハン』(*McLuhan in space*)を著し、エクステンションの論点に本格的に取り組んだ。ある種の合意の下で二〇世紀中に決着が図られた論点が二一世紀の初頭に掘り起こされた事実は、それだけでも特筆すべきである。同書の註にはフラールとホールとの論争はもちろんのこと、先行研究が手際よくまとめられている⁽³⁰⁾。

キャヴェルはまず、マクルーハンが博士論文(「当該時代の学習におけるトマス・ナッシュの位置」

『The place of Thomas Nashe in the learning of his time』を準備する過程で三科の三つの部門（文法、修辞学、論理学）の争いから西洋文化を捉える視座を獲得したと指摘する⁽³¹⁾。キャヴェルによれば、マクルーハンが博士論文で取り上げたナツシュの特異な文体は、それまでバランスが取れていた三科間の協調関係が終焉し、修辞学との覇権争いに論理学が勝利を収めつつあった一六世紀半ばの文化状況を象徴するものである⁽³²⁾。

次にキャヴェルは、中世的な知の統一の崩壊にともない修辞学のリストに「prosthesis」という用語が新たに加わったというD・ウィルズ(David Wills⁽³³⁾)⁽³⁴⁾の説に注目する。修辞学における prosthesis は、『語の頭に音節を付加すること』(Wills, 1995, p.218) (Cavell, 2002, p.80)を意味し、『語頭音付加』と訳出される。例えば、スペイン語の escuela はラテン語の scola に e を付加した語頭音付加である⁽³⁵⁾。

ウィルズは、修辞学の歴史に語頭音付加が登場した頃、医学の歴史で目覚ましい発展があったことを指摘する。一六世紀半ばから後半にかけてA・ヴェザリウス(Andreas Vesalius 1514～1564)の『人体の構造』(De humani corporis fabrica, 1543)とアムボラーズ・パレ(Ambroise Paré 1510～1590)の『作品集』(Oeuvres, 1585)が相次いで公刊されたが、二つの著作には、『切断 amputation』と『義足などの補綴術による置き換え prosthetic replacement』に関する重要な記述が含まれていた。

修辞学と医学における prosthesis という言説の同時代性に着眼したウィルズは、一六世紀半ばを、有機体論 organicism と機械論 mechanism の二つの身体論が争い、機械論が勝利を収めつつあった時代と規定する。ここで言う有機体論は、すべての器官の共同的ダイナミズムから有機体の働きを考える点で、器官の間の因果関係から身体の手を説明する機械論の対極に位置する。諸器官のバランスを調整

することで身体機能の回復を図るそれまでの医術は、有機体論を基礎にしていた。他方、新興の補綴術は、各器官を部分に分割した上でそれらの部分を置き換え可能な対象と見做し、欠損部分を人工物で代行させる点で、機械論を基礎にする医術だった。ウィルズは、三科間の協調関係の崩壊は有機体論的発想の終焉を意味し、有機体論に代わって機械論が台頭したことによって *prosthesis* という言説が登場したと推論する。

キャヴェルは、このようなウィルズの説をもとに、マクルーハン解釈を展開する。機械論が台頭する中、医学では補綴術が栄え、人文科学では因果的な数学に基礎を置く論理学が勝利した。そして、個々の器官に注目する補綴術が勢力を伸ばすことで器官全体のバランスを図る医術が衰退したように、論理学が学問に君臨することで三科間のダイナミズムが失われた⁽³⁶⁾。キャヴェルは、マクルーハンの記述にも *prosthesis* に類する用語が登場することに着目する。事実、キャヴェルが指摘するように、マクルーハンは『メディアの理解』(*Understanding media*, 1964)⁽³⁷⁾ や書簡⁽³⁸⁾ の中で「ablation (手術による) 切除、切断、剥離」の語を使用している。

キャヴェルが *ablation* に着目した理由は、以下の二つの引用から理解できる。一つ目は、「マクルーハンが指摘するように『切除したものの *ablations* が社会に介入してくる時、それらは、社会体系を改変する。 *ceteris paribus* [他の事情が同じならば] という条件は、メディアや技術の世界には存在しない。すべての *extension* や *acceleration* は全体状況において新しい配置に即座に影響を及ぼす」(McLuhan, 1964, p.184)」(Cavell, 2002, p.81) という引用である。ここでキャヴェルは、メディアや技術は *ablation*、あるいは *extension* であり、それらが社会全体を同時に、しかも即座に変えるというマ

クルーハンの発想を指摘する。二つ目は、『いかなる発明や技術も、私たちの身体の extension、または自己切断 self-amputation であり、このような extension は、その他の器官や extensions の間に新しい比率や均衡を引き起す』(McLuhan, 1964, p.45) (Cavell, 2002, p.81) という引用である。ここでは、ablation や extension による社会体系の配置の改変というマクロな運動が、有機体内部の比率の改変というミクロな運動と相似の関係にあるというマクルーハン理論の特徴が指摘されている。以上二点を踏まえて、キャヴェルは次のような解釈を提出する。「彼（マクルーハンは）、補綴文化の二つの側面、すなわち extension と amputation を包含するメディアのダイナミクスを表現しようとした」(Cavell, 2002, p.80)。

extension と amputation が医学と修辞学の二つの分野に見られる言説であり、二つの分野の言説が補綴文化の形成に寄与したという点は、ウィルズの説で説明できる。しかし、ウィルズは、補綴文化は機械論を基礎とし、補綴文化が広まることで、器官の間のダイナミクスを前提する有機体論が駆逐されたと主張したのではなかったか。もしそうならば、メディアのダイナミクスに「補綴文化」、「extension」、「切断 amputation」が含まれるというキャヴェルの解釈は、ウィルズの説と矛盾することになってしまふ。ここでキャヴェルは、マクルーハンが、機械論を基調にする補綴文化の存在を念頭に、あえて補綴にまつわる修辞を、その意味を反転させ、ダイナミクスを表現する有機体論的な意味で使ったと解釈するのである。

キャヴェルは、さらにこう続ける。「prosthesis という言説の（医学と修辞学における）歴史的な同時代性は、有機体論と機械論の拮抗を暗示する。この拮抗は機械論の勝利に終わり、機械論の覇権は電

子時代の到来まで続いた。マクルーハンは、電子時代が到来することで、有機体論が覇権を取り戻した（状況を反転させた）と考えた」（op. cit.）。マクルーハンは、電子時代の到来によって有機体論の文化が形成されることを見通して、新しい文化にふさわしい extension の修辭を使用した。マクルーハンの思想は、機械論を相対化し、有機体論を復活させる射程を持つており、マクルーハンの思想における extension は、prosthesis と親和性を持ちながら補綴文化の基礎にある機械論を超越する働きを担った。以上がキャヴェルのマクルーハン解釈である。

このようなマクルーハン解釈の文脈で、キャヴェルは、extension の起源にも言及している。キャヴェルは、マクルーハンと共通する extension を使用した思想家としてフロイトの名をあげる。フロイトは、『文明とその不満』（*Civilization and its discontents*, 1930）⁽³⁹⁾のなかで「『人間は一種の補綴の神 prosthetic God になった』（Freud, 1989 (1930), p.44）」（Cavell, 2002, p.82）と書いている。フロイトの記述をキャヴェルは次のように解釈する。すなわち、「フロイトによれば、『人間は、あらゆる道具によって、運動器官と感覚器官を問わず、自らの器官を完全なものにし、元々の器官に備わった機能の限界を取り除きつつある』（Freud, 1989 (1930), p.43)。ここでフロイトは、マクルーハン同様、西洋文明史を人間の力の extension という文脈に置いている」（Cavell, 2002, p.82）。フロイト自身は「『すべての補助的な器官を身にまとった時、人間はまさしく偉大な存在になる。しかし、元々備わった器官でない以上、補綴具は人間に大きな混乱を与えることもあるだろう』（Freud, 1989 (1930), p.44）」（Cavell, 2002, p.82）と結んでいるのだが、キャヴェルは、フロイトの補綴術の記述にマクルーハンの extension に共通するメディアのダイナミクスを読み取り、次のように結論するのである。「フロイトとマクルーハンはともに、

感覚の相互関係を変容させるものとして文明化の過程を理解した」(Cavell, 2002, p.82)。

この結論を補強するために、キャヴェルは再びウィルズを援用する。「ウィルズによれば、フロイト理論に特有の補綴の理解は、フロイトが『快楽原則の彼岸』(*Beyond the pleasure principle*, 1920)で定義した『投影』の概念に見られる。『投影とは』不快を大幅に増大させる内的興奮に対処するための：独特な方法である。人間には、その原因が、内部ではなく、外部にあるかのようにして内的興奮を処理する傾向がある』(Wills, 1995, p.96) (Cavell, 2002, p.82)。キャヴェルは、マクルーハンが一九六〇年の“Report on project in understanding new media”で「心理学ではSC (sensory completion : 感覚完成)は投影と呼ばれている」と書いていることをあげながら、投影を次のように解釈する。「このように投影の過程は、その機能の点で、感覚器官の間に感覚比率や感覚の均衡が存在するというマクルーハンの考えに非常によく似ている」(Cavell, 2002, p.82)。投影が内的興奮状態を変容させ、その結果、平静が回復するように、補綴にも、内的な感覚の均衡を前提に、感覚器官の間の感覚比率を変容させる働きがある。

こうしてキャヴェルは、内的状態に作用するという点で、フロイトの補綴とマクルーハンのextensionを同一視する。そして、元々は機械論的で静的な意味を持つ補綴の概念によって動的な状況を記述するフロイトを、静的なことばの意味を反転させて人工物と身体ダイナミクスを表現したマクルーハンの先駆けに同定するのである。

とはいえ、「精神分析で使われる意味での prosthesis は、より大きな extension の歴史の一面ではない。物理学と哲学もこの歴史に含まれる。extensionを哲学的に理解するために最も重要なのは、デ

カルトの作品である」(op. cit., p.83)。キヤヴェルはデカルトの哲学を次のように理解する。デカルトは、身体を含む物質界の *res extensa* と理性を備えた心の *res cogitans* の区別を理論化した。デカルトは、心と身体を峻別することで真理を探究しようとしたが、そのような方法論を採用した背景には、感覚できる物質界と感覚自体に対する不信があった。デカルトが信用できたのは、理性と理性の宿る心、そして理性に基づく論理学だけだった⁽⁴⁰⁾。当然、論理学に特化したデカルトの方法論とその根底にある理性主義は、三科間のダイナミクスを回復しようというマクルーハンには受け入れられない。「したがって、マクルーハンは心と身体、*res cogitans* と *res extensa* の(再)統合を企てて、デカルト流の理性主義に對抗した。その結果、デカルト哲学が提出した機械論のモデルに代わる有機体論(究極的には生態学)のモデルを提案したのである」(Cavell, 2002, p.83)。

キヤヴェルによれば、一七世紀前半のデカルトの哲学は、論理学と機械論を徹底した点で、一六世紀半ばに始まった補綴文化を完成させるものだった。「extension 全体の歴史」とは、義足や義手などの補綴物と身体存在を *res extensa* = *extension* と規定したデカルトによって哲学的基礎を与えられた「prosthesisの歴史」を指すものと理解できる。

評価

キヤヴェルの議論を概観すると、三つのエクステンションを示唆するかのように見える。外化、拡張、延長の順でその内実を検証していこう。

まず、「彼（マクルーハン）は、補綴文化、extension、切断 amputation の（医学と修辞学の）二つの側面を包含するメディアのダイナミクスを表現しようとした」（Cavell, 2002, p.80）に見られるように、キャヴェルは、extension を切断 amputation と併記していた。さらに extension を外化 outer と言い換えている箇所もある⁽⁴¹⁾。ここから、キャヴェルは、マクルーハンのエクステンションを外化の系譜に属するものと理解しているようにも見える。しかし、キャヴェルの記述には、外化したものを通じてその母体の身体内部を解明するという契機への言及がまったく見られない。キャヴェルのエクステンション理解は、外化について不十分だと結論できる。理解が十分でない一因は、分節の作業が系譜の探索をとまなわなかったために、原義の持つ論理に到達できなかったところに求められる。

次に、「拡張」の系譜についてどうか。「フロイトによれば、『人間は、あらゆる道具によって、運動器官と感覚器官を問わず、自らの器官を完全なものにし、元々の器官に備わった機能の限界を取り除きつつある（Freud, 1989(1930), p.43)』。ここでフロイトは、マクルーハン同様、西洋文明史を人間の力の extension という文脈に置いている」（Cavell, 2002, p.82）。フロイトの言う prosthesis は、人工的な補綴物を身に着けることで元々の器官の機能の限界が取り除かれるという点で、人工物が身体に元々備わった機能を代行し、増大するという拡張の系譜に定位するものと理解できる。フロイトの補綴術の考察は、同時代のバナールや後のウォーリックのサイボーグ論と同様に、プラトンに始まる技術論の系譜に属する。キャヴェルによるフロイトの引用は、キャヴェルがフロイトの拡張の議論を前提に extension の語を使用したことを裏づけるものである。さらに、キャヴェル自身による次のような記述もある。「マクルーハンにとって extension は、眼の『切断 amputation』によって耳が拡張 enhance されるというよ

うに、amputationとダイナミックに関係している」(op. cit., p.87)。こゝでは、extensionが「拡張(向上enhance)」と明確に関連づけられている。また、外化との関連を仄めかしていた「切断」は、眼の機能を抑制することで耳の機能が相対的に向上するというように、『バイドロス』の説話で拡張と対になって登場した縮小の意味で使用されている。この引用は、キャヴェルが、感覚間の比率関係を前提に、機能の拡張の意味でエクステンションを使用していたこと、そして、主に拡張に定位してマクルーハンを解釈していたことを物語るものである。

特筆すべきは、「補綴」への着眼から、キャヴェルがエクステンションの起源にデカルトの*res extensa*をあげている点である。第一章で論証したように、第三のエクステンション、すなわち延長は、デカルトの思想にその起源を持つ。これでキャヴェルの記述に合計三つのエクステンションが登場したことになる。

しかし、残念ながら、読者が三つの意味を読み取ることはおそらくできないだろう。というのも、キャヴェルは、一貫してデカルトの*res extensa*を「補綴」の起源と見做し、第三の意味を分節する作業を行わなかったからである。

三つの意味を分節しうる点、正確に言えば、二つの意味の分節に加え、三つ目の意味を分節する手がかりを示した功績は、エクステンションを主題にしたマクルーハン研究の中で比肩するものがない。しかし、結果的にエクステンションの意味を拡張に収斂させたことでもっと大きな獲物を見落とすことになった。この見落としは、論争の再評価の如何以上に、マクルーハンの思想の多層性を解読する鍵をみすみす放棄することを意味した。その結果、マクルーハンの理論を把握する道が閉ざれてしまったので

ある。

むすび

キャヴェルの議論は、一六世紀半ばに現われた「補綴」という拡張のヴァリエーションに着目してマクルーハンを解釈した点に独創性が認められる。この仕事は、論争を再評価する観点からすると、ホルの先取権を無効にする効果があった。しかし、以上で検証した通り、それぞれのエクステンションの理解が十分でなかったために、三つの意味を明示的に分節するには至らなかった。

本稿でエクステンションが構成する理論の全貌については紹介しなかったのは、小論という体裁の紙面の都合からだけではない。誤解を恐れずに言えば、その必要がなかったからである。マクルーハンの思想からは、エクステンションに注目することで少なくとも一つの理論を摘出できる。その作業には、エクステンションから三つの意味を切り分ける作業が不可欠なのである。本稿の主題は、結局のところ、エクステンションが構成する理論の是非以前の、エクステンションの分節の是非にあったということになる⁽⁴²⁾。

キャヴェルがエクステンションの分節に失敗した原因は、一言で言うところ、原型に遡る系譜学的視点の欠如に求められる。翻って、キャヴェルの仕事と比較したとき、本稿の課題も明らかにになる。それは、系譜学的な探究の手続きにおいて、歴史の時代区分を等閑する嫌いが認められる点である。歴史を縦断する概念の継続性に着目する視点に、例えば、近代として考察されてきたある時代区分の特質をどのよ

うに取り込むべきか。今後の課題としたい。

(しばた たかし・北海学園大学准教授)

〔引用・参考文献〕

- ブッシュ V.、西垣通(訳) 一九九七：われらが思考するところ 思想としてのパソコン N-TT出版 pp.65-89 (Bush, V. 1945 July: As we may think, *Atlantic Monthly*, 176, pp. 101-108.) .
- Carpenter, E. 2001 : Appendix B, Theall D. F. 2001 : *The virtual Marshall McLuhan*, McGill-Queen's Press, Montreal & Kingston, London, Ithaca, pp. 236-261.
- Cavell, R. 2002 : *McLuhan in space*, University of Toronto Press, Toronto, Buffalo, London.
- タゴニエ F. 金森修(訳) 一九九八：病気の哲学のために 産業図書 (Dagognet, F. 1996 : *Pour une philosophie de la maladie; entretiens avec Philippe Petit*, Editions TEXTUEL, Paris.)
- Dagognet, F. 1996 : *Pour une philosophie de la maladie; entretiens avec Philippe Petit*, Editions TEXTUEL, Paris.
- Engelbart, D. 1963 : A conceptual framework for the augmentation of man's intellect, *Vistas in Information Handling*, vol. 1, Howerton, P. W. (ed.), Spartan books, Washington, D. C..
- ホール E. T. 國弘正雄・長井善見・斎藤美津子(訳) 一九九七：沈黙の空間 南雲堂 (Hall, E. T. 1959 : *The silent language*, Doubleday and Company Inc., New York.)
- Hall, E. T. 1959 : *The silent language*, Doubleday and Company Inc., New York.
- Hall, E. T. 1994 : Chapter H. - visual and other words, *Who was Marshall McLuhan*, Stoddart Publishing Limited, Toronto, Canada, pp. 148-151.
- ヒポクラテス小川政恭(訳) 一九七六：古い医療について 岩波書店 (*Hippokratès : Peri archaïas ietrikes*)
- ヤスパース K. 内村祐之・西丸四方・島崎敏樹・岡田敬蔵(訳) 一九五三：精神病理学総論 上 岩波書店 (*Jaspers, K. 1948 : Allgemeine Psychopathologie* (original work published in 1913).)
- Marx, K./ Engels, F. 1952 : *Capital*, Adler, M. J. (ed.), *Great books of the western world 50 Marx*, University of Chicago, pp. 1-414 (Marx, K. 1867 : *Das Kapital*). .
- マルクス K. 向坂逸郎(訳) 一九七一：資本論 第一巻 岩波書店 (Marx, K. 1867 : *Das Kapital*.)
- McLuhan, M. 1997 : *The Gutenberg galaxy*, University of Toronto Press, Toronto Buffalo London (original work published

in 1962).

McLuhan, M. 1964 : *Understanding media*, McGraw-Hill, New York.

McLuhan, M. 1972 : *Culture is our business*, Ballantine Books, New York (original work published in 1970) .

McLuhan, M./ McLuhan E. 1988 : *Laus of media*, University of Toronto press, Toronto Buffalo London.

Merleau-Ponty, M. 1962 : *Phenomenology of perception*, translated by Smith, C., Routledge & Kegan Paul Ltd. (Merleau-Ponty, M. 1945 : *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, Paris.) .

メルロー・ポンティ M. 竹内芳郎・小木貞孝(訳) 九九一 : 知覚の現象学 I みすず書房 (Merleau-Ponty, M. 1945 : *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, Paris.)

プラトン 藤沢令夫(訳) 一九九三 : パイゼロス 岩波書店
ポラニー M. 長尾史郎(訳) 二〇〇一 : 個人的知識 ハーベント社 (Polanyi, M. 1962 : *Personal knowledge*, The University of Chicago Press, Corrected edition.)

Polanyi, M. 1962 : *Personal knowledge*, Corrected edition, Routledge & Kegan Paul Ltd., London.

Ramo, S. 1969 : The computer as an intellectual tool, *Beyond left & right*, edited with and introduction by Kosteianetz, R.,

William Morrow and Company, Inc., New York pp. 47-51 (Reprinted with the permission of the American Federation of Information Processing Society, 1965.) .

Reed, E. S. 1996 : *Encountering the world*, Oxford University Press, New York Oxford.

Rosenthal R. (ed) 1969 : McLuhan, (Herbert) Marshall, Rosenthal R. (ed.), *McLuhan : pro and con*, Penguin Books, U. S. A., pp. 15-22 (originally published in the June 1967 : Current biography, The H. W. Wilson Company.) .

三枝博音 一九七七 : 技術の哲学 岩波書店(一九五一年初版)

柴田崇 二〇〇六 : 「透明」になる道具の生態学的意義―J・J・ギブソンの道具論のホルト流解釈 U T C P 研究論

集 第七巻 二二―二三頁。

柴田崇 二〇〇七 : サイボーグの理解―extension の系譜学 U T C P 研究論集 第一〇巻 二三―五〇頁。

柴田崇 二〇一一 : ファイボーグの理解 新人文学 第八号 三六―九七頁。

柴田崇 二〇一三：マクルーハンとメディア論―身体論の集合 勁草書房。

城塚登 一九八五：近代の思想と技術 技術と倫理 日本倫理学会論集 二〇 日本倫理学会 一一四―一一七頁。

所雄章 一九九六：デカルト Ⅱ 勁草書房。

Wagner, G. 1969 : *Misunderstanding media: obscurity as authority*. Rosenthal R. (ed.), *McLuhan : pro and con*, Penguin Books, U. S. A. pp. 153-164 (originally published in 1967 March : *Kenyon Review*).

Warwick, K. 2002 : *I, cyborg*, Century.

〔註〕

- (1) 生年不詳。
- (2) Cf. Hall, E. T. 1959 : *The silent language*, p.79.
- (3) ホール、一九五九 國弘他訳、一九九七、八〇頁。
- (4) E.g. McLuhan, 1964, p.64, McLuhan, 1972(1970a), 18. また、マクルーハンの最晩年の著作『メディアの法則』(Laws of media, 1976, p.129 ～) に登場するメディア分析のモデル(四次元モデル tetrad) は、「拡張」の意味の extension を一つの項として構成されている。
- (5) Rosenthal(ed.), “Current biography”, p.19.
- (6) ホールは、この概念が R・B・フララー (Richard Buckminster Fuller 1895～1983) に起源あるという説を唱え、マクルーハンを論難した。論争に対するフララーの発言を含め、論争の詳細については、『マクルーハンとメディア論』の第二章、および第六章を参照されたい。
- (7) Wagner, 1969, p.158.
- (8) 生没年不詳。
- (9) Carpenter, 2001, p.256.
- (10) Rano, 1969(1965), p.48.
- (11) 生没年不詳。

- (12) Cf. Reed, 1996, p.9
- (13) マルクス 向坂訳、一九七一、四八二頁、cf. Marx, Engels 1952(1867), p.188.
- (14) Cf. 城塚、一九八四、一一四―一二七頁。
- (15) Cf. プラトン、藤沢訳、一九九三、一三三―一三五頁。
- (16) 拙稿「サイボーグの理解」(二〇〇) および「ファイボーグの理解」(二〇一二)で詳説したので参照されたい。
- (17) McLuhan, 1962, pp. 24-26.
- (18) マクルーハンが *outering* と並行して *uttering* を挙げた理由は、本稿の論証に直接関係ないため割愛した。両者が並置される理由については、拙著『マクルーハンとメディア論』の一一五ページ以下で詳説した。
- (19) ダゴニエは、フロイトの「転移」とC・G・ユング (Carl Gustav Jung 1875-1961) の「誘導語」が外化の一種であると指摘する (ダゴニエ、一九八二 金森他訳、一九九〇、二二六―二三二頁)。
- (20) 拙著『マクルーハンとメディア論』第三章で詳説した。
- (21) 拙著『マクルーハンとメディア論』第六章を参照されたい。
- (22) 「我々は闇の中で道を探るとき、杖の先で感ずる。自己空間、即ち我々の解剖的身体空間は拡大して、杖と自分が一体であるという感覚となる。従って自分が操縦する自動車は、私が思い通りに使いこなせるときには自己の空間に属し、拡大した身体 *erweiterter Körper* のようなもので、この拡大身体の中に、私は自分の感覚を具えつつ至るところ居合わせているわけである。自分のものでない別の空間は、私が自己の感覚を以って他空間から来る対象に突きあたるその境界から始まる」 (Jaspers 1913: 75=1953: 135-136)。
- (23) 「盲人の杖も、彼にとって一対象であることをやめ、もはやそれ自体としては知覚されず、杖の尖きは感性帯へと変貌した。杖は〔盲人の〕触覚の広さと行動半径を増したのであり、視覚の類同物となったのである」 (Merleau-Ponty 1962(1945) : 167=1991 : 240)。
- (24) Polanyi 1962=2001: 51-55
- (25) Gibson, 1983(1966), pp.111-115.
- (26) Gibson, 1986(1979), pp.40-41.

- (27) 所、一九九六、二八二―二八三頁。
- (28) ギブソンのデカルト批判が身―物二元論のみならず心―身二元論に及ぶ点は、別稿(柴田 二〇〇六)で論じた。ギブソン心理学における「心」の問題についても確認されたい。
- (29) 『マクルーハンとメディア論』では、本稿で割愛せざるを得なかった、各エクステンションの正統を受け継いできたその他の思想以外に、ヴァリエーションも紹介した。該当箇所を確認されたい。
- (30) Cavell, 2002, p.256.
- (31) Cavell, 2002, p.79.
- (32) Cavell, 2002, pp.79-80.
- (33) 生没年不詳。
- (34) =Wills, D. 1995 : *Prosthesis*, Stanford U.P., Stanford.
- (35) Cf. 2001 : *The Concise Oxford English Dictionary, 10th edition*, Oxford University Press.
- (36) Cavell, 2002, p. 80. Cf. Wills, 1995, pp.214-227.
- (37) McLuhan, 1964, p.5, 45, 57.
- (38) Molinaro et. al. (eds.), 1987, p.283, 285.
- (39) =Freud S. 1989 : *Civilization and its discontents*, Strachey, J. (trans. & ed.), Gay, P. (intro.), Norton, New York. cf. Freud S. 1930 : *Das Unbehagen in der Kultur*.
- (40) Cavell, 2002, p.83.
- (41) Cavell, 2002, p.80.
- (42) ここであえて二つのエクステンションが理論の構成で果たした役割のみを簡単に説明するならば、「拡張」はメディアの機能に陶醉している現状を記述するために、「外化」はメディアを産出する身体 of 内部構造に議論の焦点を移し、併せて現状を対象化する詩的言語を獲得するために、「延長」は詩的言語を使用してその効果を測るために用いられる。